



止めの
ご褒美は

♂
男装乙女
♀

イチャエロ
です!

試し読み版



小説 市村鉄之助

挿絵 イット

止めのご褒美は
男装乙女と
イチャイロです！

プロローグ

一章 男装勇者ケイトの口止め奉仕

二章 男装ライバルアキラとお尻でエッチ

三章 伯爵令嬢ティアナの告白

四章 初体験

エピローグ



ディノ・ターナー

ランスタイト学園に通う青年。学園一位の実力を持つケイトを超えるため幾度も挑むが、未だ勝てず。

ケイト・ブレナン

教会に選ばれた聖剣使いの勇者。可愛らしく小柄な見た目とは対照的に圧倒的な実力を持ち、学園一位の座に君臨している。

アキラ・コノエ

闇属性の魔剣契約者。ケイト、ディノに次ぎ学園三位の実力を持つ。勝負に身が入っていないディノに実力行使で活を入れることも……。

ティアナ・リントナー

貴族の令嬢。回復や後方支援の魔術を得意とし、負傷したディノを呆れながらも癒してくれる。

登場人物紹介

ごくり、と唾を飲み込んだのはケイトか、デイノか、それとも両方か。大きく息を吸い込んだ少女は、熱と決意を帯びた瞳をデイノに向けて、「デイノにも秘密ができればボクの秘密も絶対に言えなくなるよね？」男装しているとは思えないほど艶やかな表情を浮かべた。

※

ケイトはデイノの下着を勢いよくずりおろす。瞬間、固くなった男根が勢いよく飛び出した。

男性器を目の当たりにした男装少女は、自分にはない陰茎に驚き硬直するも、すぐに正気を取り戻す。唾を飲み、恐る恐る細くしなやかな指を固く反り立つ肉棒へ伸ばした。

「——っ」
少女の指が男根に触れると、甘い痺れが快感となつてデイノに襲いかかる。

誰かに性器を触れられたことなど初めてのため、未知の感触と快感に戸惑ってしまった。
「ご、ごめん、痛かった？」

「違う、そうじゃなくて、その……」

（気持ちよかったなんて言えるわけがないだろっ）
言葉に迷っていると、心中を察したのかケイトが嬉しそうな表情を浮かべた。

「ふふっ、気持ちよかったんだね。嬉しいな……男の子みたいなボクでも感じてくれるんだね」

戸惑いと不安があったケイトの動きがしつかりとしたものとなり、細い指が肉棒を握りしめる。

「んっ、すぐく、熱いっ」

柔らかい指が肉棒を握ると、甘い吐息が少女から漏れる。

ぎこちなく手が動いたたびに痺れるような快感が男根に襲いかかった。

「少しだけどね、ボクも男の子のことを勉強したんだ。男装するなら、知っておかなきゃならないこともあると思って。男の子がどうすれば気持ちよくなってくれるのかわかるんだよ」

頬を赤くしたまま明かされた独白通り、彼女の手が肉棒を掴み上下に動かされる。

すべらかな指が陰茎をしごいていく光景はあまりにも卑猥に見えた。それ以上に、ケイトの姿は男子の制服であるため、眼前の光景は倒錯的にさえ映る。

（男同士に見えれば興奮が治まるかと思っていたのに、ケイトの手が気持ちよすぎておかしくなりそうだっ……俺、変な趣味があったのか？）

ケイトの姿に興奮がより強くなっていく自覚から自らの性癖が心配となる。そんなデイノの不安などつゆ知らず手淫は続いていく。

少女にも興味があったのだろう。視線は男性器に釘づけとなり、距離も近くなっている。

「すごく濃い、男の子の匂いだね……頭がくらくらしちゃう」

下半身をくねらせ手淫する少女の顔は肉棒からわずかに離れた場所にあった。少女に手で奉仕されている興奮のせいで肉棒の先端からは我慢汁があふれている。

ディノ自身がわかるほど濃厚な雄の匂いがするが、男装少女は男の精の匂いを嗅いでも嫌な顔ひとつするどころか、より艶を増して蕩けた表情を浮かべた。

陰茎を握る手には力が入り、しごく勢いも増していく。

快楽を与えられているディノはもちろんのこと、手淫をしているケイトもそろって息が荒い。

熱い吐息が男根にかかるたびに、亀頭が大きさに反応してしまふ。ケイトは驚きながらも、手淫が上手にできているのだと喜び、肉棒をしごき続けた。次第にぎこちなさが消え、もつとも敏感な亀頭と鈴口を中心に刺激をしていく。

ついには肉棒に唾を垂らし、指と唾液を絡ませ始めた。

「んむうっ……これでもっと気持ちよくなるかな？」

知識で見知ったものではなく、手奉仕をしながらより快感を与えようと模索した結果の行為だった。

「ケイトっ、それっ、やばいっ！」

「あはっ、嬉しい。気持ちいいんだね？」

唾液が潤滑油がわりとなり、にちゃにちゃと淫靡いんぴな音を立てて指が陰茎と絡みあう。我

慢汁も量を増し、少女の指を汚し、よりぬめりを強くした。

油断すればいつ射精してもおかしくない快感が少女の手によって与えられている。

奥歯を噛みしめてこみ上げてくる射精感に抗うも、手淫によってさらなる刺激が襲いかかってくる。

(このままじゃケイトを汚してしまふ、我慢しろっ、我慢するんだ！)

唾液が少しでも乾き滑りが悪くとなると、躊躇ためらいなく唾液を追加するように肉棒に垂らしていく。

少女の熱い唾液と手が亀頭を包むたびに、まるで彼女の体内に入っている錯覚に陥りかける。

(いっそ、欲望のままにケイトの中に——)

デイノの中にはいつしかドス黒い欲望が生まれていた。

手が唾液と我慢汁によって汚れても嫌な顔をせずに一生懸命に刺激を与えようと奉仕をするケイトの姿は健気に映る。

(押し倒すことができれば、ケイトとセックスできればどれほど気持ちいいんだ?)

快感のせいで邪よこしまな感情があふれるも、理性を総動員して欲望を殺し耐える。

思春期の男子の性欲の深さに気づくことのないケイトは危うい。その危うさが少女らしく、興奮を高めてくれる。

(ケイトも気持ちよくなっている?)

下半身をよじる姿を見て、もしかしたらと思うとより高ぶりが増していく。

「はあっ、んんっ……いつでもだしていいからね？」

（そんな健気なこと言われたら——もうっ）

上目遣いでそんなことを言われてしまったのが引き金となり、今まででもっとも強い射精感が腰のうしろにこみ上がってくる。

思わず腰が浮いてしまうと、ケイトももうすぐ限界が訪れるのだと気づき、しごく手に力を込めた。ニチャニチャする卑猥音が静かな部屋に木霊する。

荒く熱を帯びた吐息と、卑猥な水音が繰り返されていく中——ついに限界が訪れた。

「ケイトっ、離れてくれ、限界なんだ！」

射精することは抗えないが、せめてケイトを汚してしまうことだけは避けたかった。しかし、彼女は嫌がるどころか嬉しそうに表情を緩めた。

「いいんだよ。ボクでたくさん気持ちよくなっつっ、ボクを汚してえっ！」

射精されることを望み、しごく勢いを増していく少女の手淫によってついに我慢の壁が破壊され、溜まっていた欲望が飛びだした。

——びゆるうっ、びゆるるるっ、びゅっ、びゅっ、びゆるるるるっ！

「熱いっ、ディノっ、熱いよお……ボクの手、火傷しちゃいそうだよお」

解き放たれた精液が容赦なくケイトの手を汚していく。

彼女の裸体を見たときから悶々とため込んでしまっていた欲望の量はあまりにも多く、

少女の日に焼けた細い指を白く染めていった。

久しぶりの射精の余韻は強く、自分でも驚くほどの量をだしてしまったことを気にしている余裕はない。

射精したデイノも、精を身に浴びたケイトも、呼吸を荒らげてただ茫然ぼうぜんとしている。

お互いに初めての経験を味わったことにより、意識を遠くに飛ばしていたが、いち早く正気を取り戻したケイトがなにを思ったのか指に絡みつく精液を舌で舐めとった。

「お、おい」

突然の彼女の行動に正気を取り戻す。慌ててティッシュを渡そうとするが、少女は気にすることなく指から白濁液をすべて舐めとってしまう。

（そんな姿を見せたら、また興奮するだろ……！）

「んちゅう……精液ってこんな味がするんだね。苦いけど、嫌いじゃないよ。デイノのだからかな？」

そんなことを言い、精液を嚙下えんげしてしまった。

十分に驚きに値する光景であり、まさか精液を飲み込むなどと思っていなかったデイノだが、ケイトはさらに驚くべき行動をとる。

「こっちも綺麗にしてあげるね」

「——え？ どういう——ちよつと待って、それはっ」

止める間もなくデイノの股間に顔を埋め半立ちとなった亀頭を啜えてしまった。

「——んっ、ちゆるるっ、ちゆるるるっ」

赤いショートカットを揺らして肉棒に吸いつき精液を嚥下する少女の姿は、男装していることなど忘れさせてしまうほどいやらしい。

(やばいっ、口でするなんて、ああ、くそっ、気持ちいいっ)

舌が陰茎に絡みついたときに快感が津波のように襲いかかり、射精したことで固さを半分失っていた肉棒が再び固くなっていくのがわかった。

肉棒を頬張っていた少女がそのことに気づかないはずがなく、一度口の中の動きを止めると、上目遣いでディノを見る。

「節操がなくてごめん……でも、口でされたら誰だって——ぐっ」

謝罪するディノに、少女は気にしないでと言わんばかりに柔らかい笑みを浮かべ、口奉仕を再開した。

「んぢゆるるっ、んぢゆるるるるっ……んちゆるるっ、ぢゆるるるうっ」

精液と唾液にまみれた男根を掃除するためではなく、明らかに快感を与えるための口淫として舌が絡みつき、龟头を吸いあげる。

唾液が絡まりジュルジュルと少女の整った唇から音が漏れ、今まで以上に興奮と刺激を得ていく。初めて受ける口奉仕による快感は想像を絶し、腰が抜けそうだった。

(ケイトの口の中、すぐくぬるぬるして——火傷しそうなほど熱いっ)

少女の中に肉棒を収めたいという衝動が叶い、興奮以上に嬉しさがこみ上げてくる。



破けた制服から覗くアキラの胸元にはたわわに実った乳房があった。巨乳という言葉がぴったりなほど、大きく柔らかそうな乳房が眼前に晒されている。

「——っ」

慌てて胸を隠すアキラだが、もう遅い。見てしまった。いまだ、信じられないディノをアキラが睨む。心なしか頬が赤いのは気のせいだと思いたい。

「アキラ・コノエ……お前、女だったんだな」

今までどうやってこれほど大きな胸を隠していたのか不思議に思いながら、二人目となる男装少女との邂逅に頭が痛くなる。

もう戦う意思はないことを示すため、ディノは剣を霧散させた。

※

「勘弁してくれ。嘘だろ、お前男装してたのか？」

「どうして剣を消した！」

新たな男装少女の登場に戦意を失ってしまったディノだが、アキラは納得できないように憤りを露わにしている。

「悪いけど、これ以上女の子と不必要な戦いをするつもりはないよ」

「私を女扱いするなっ。私はどうの昔に女であることは捨てたんだ！」



そう言う彼女だが、露わになった乳房を隠すため腕で覆い隠している。もし本当に女であることを捨てているなら胸を隠したりはしないはずだ。

(それにしても大きい胸だなあ……)

思い浮かぶのはケイト・ブレナンのほぼ平らと言っていい胸だ。感度は良好で、桜色の乳首に触れるだけで甘い声をだしてくれる。平らといっても、女の子の身体は柔らかいので、揉むことは難しいが触れて撫でるだけで十分に満足することができていた。

対し、腕で覆っていても隠しきれないアキラの巨乳は、すごい一言に尽きる。

「おいっ、どうして私の胸をそんなに凝視しているんだっ、破廉恥だぞっ」

胸を視線から隠すためにうしろを向きながら、わずかに赤くなった顔で睨まれてしまった。

「悪い。その、どうやって胸を隠していたのかなって思ったんだ」

「今ここで気になるのはそこのか!？」

怒っていたはずのアキラだが、なぜかデイノに呆れた視線を向けた。

デイノは自らが発した言葉がデリカシーに欠けていることに気づくも、もうすでにあと祭りだった。取り繕っても無駄なので、素直に頷いておく。

不思議と心は落ちついていていた。ケイトが男装少女だと知ったときには、心臓が止まるほど驚いたが、二度目となると耐性ができていたようだ。

(だけど、まさか同級生に、それも学園順位の一位と三位が男装少女なんて——夢でも見

ているようだ)

「お前のような破廉恥男には教えないっ！ それよりも早く構えろ。勝負はまだ終わっていない！」

胸を隠したまま片手で魔剣を構えるアキラに、ディノは制服の上着を脱いで投げた。

「これはなんの真似だ？」

「とりあえず着てくれ。どうせ胸を片手で隠したまま戦うなんて無理だろ？」

「……くっ」

指摘するとアキラはわずかに目を見開いてから、悔しげに唇を噛む。

女であることを捨て、男として生きているのだから乳房を見られても構わないはずだ。自分自身でもなぜ胸を隠しているのかわからない少女は、ディノに見られることが恥ずかしいと思ってしまったのだ。

まるで女のような感覚に悔しさがこみ上げてくる。なによりもライバル視していた相手に正体を知られてしまったことが悔しくてならない。

「いくらお前が女じゃないって言っても、全部を捨てることなんてできないと思う。理由は知らないけど、今はとりあえずその大きな胸を隠してくれ」

「大きいなど言うなっ！」

なんとも言えない悔しさと、羞恥を覚えてしまったという戸惑いから善意で渡してくれたとわかつている彼の上着をアキラは受け取ることができず、投げ返してしまった。

意地っ張りな態度にディノは嘆息するも、最低限のマナーとして彼女から視線を外し、うしろを向いた。

「ディノっ、なぜうしろを向く！」

「いや、だって、女の子の裸を見るなんてできないだろ」

「だからっ、私は女ではないっ、男だ！」

「無茶言うなよ。そんなに立派なものをもっていて女じゃないなんて言われて誰が信じるんだよ。とにかく、隠せ。話はそれからしよう。な？」

聞きわけのない子供に言い聞かせるような声音のディノに、怒りと恥ずかしさから顔が真っ赤になっていくのをアキラは自覚した。

戦闘でも座学でも勝てないのに、隠していた性別まで知られてしまった。いっそ馬鹿にされたほうが楽だったが、大人な対応をされてしまい、女ではなく男だと言い続ける自分が惨めになってくる。

自分の体が女の身体であることは理解していたし、大きすぎる胸は邪魔で忌々しいとさえ思っていた。

ゆえに、見られても構わないという考えもあったはずなのに、どうしてディノに見られると恥ずかしいのか理解できず、身体が火照ってしまう理由もわからない。だからといって、ここで引くことはできなかつた。

「私を見る、ディノ・ターナー！」

「なんだよ……って、おい！　いつまで丸だしにしてるんだよつ。隠せよっ！」

「断るっ」

「いや、断るって言われても恥ずかしいのは、お前のほうだろ……」

「恥ずかしくなどない。私は男だ。胸を見られても平気だ。なんなら触っても構わないぞ、ほら！」

（困ったなあ、どう考えても混乱してるな。しかし、なんて巨乳なんだ……）

たわわに育った巨乳を惜しげもなく晒すアキラに、つい視線が向いてしまう。

無茶なことを言いながら近づいてくる少女が歩きたびに、露わになった乳房が揺れる。

ツンと上向いた乳首は薄紅色だ。破れた制服から覗く腹筋は普段から鍛えているおかげで割れて硬そうだった。

相反する二つの存在がギャップを生みだし、生唾を飲み込んでしまった。忘れていたはずの、性的欲求が蠢くのを自覚する。男だと言い張るくせに羞恥に頬を染めて涙目になりながら、胸を隠そうともしない少女に興奮を覚えずにはいられない。

（おかしいな……さっきに比べて心なしか体全体が丸みを帯びている気がするんだけど？）

一度、ケイト・ブレナンという少女によって女の子の身体がどれだけ気持ちがいいものかを知ってもかと思えられてしまったデイノにとって、アキラの身体はケイトと違う魅力にあふれているように見える。

引き締まった体軀に反して、大きな乳房。そのアンバランスさが実に興奮を掻き立てる。
(半分自棄やけになってるよな……この隙におっぱい揉めないかな——って、俺はなにを考えているんだよっ)

デイノは頭を振って邪念を追いだす。いくらなんでも、闘技場の真ん中で男装少女の胸を揉むわけにはいかない。そんなことをしてしまつたらそれだけですませられる自信がなかった。

溜まりに溜まつた性欲はアキラのせいで見るとみる股間を痛くしていく。

デイノの葛藤など知らないとはかりに若干目の据わつた少女が眼前に立ち、さあ揉めとばかりに大きな胸を突きだしてくる。

——ごくり、と喉が鳴る。

「おっ、おとおお、おち、落ちつけ、アキラ」

「お前が落ちつけ！ 私は落ちついてる。さあ、早くしろっ！」

(いや、マジでこのまま胸なんか触つたら理性を保つ自信がないぞっ)

抵抗するよりも早くデイノの手を素早く掴み、アキラは強引に自らの乳房に置く。

——ふにゅん。

(や、柔らかい……これが大きいおっぱいなのか?)

勇者さまには決してなかつた胸の柔らかさに、一種の感動さえ覚えた。

思わず、少女の大きな乳房に触れる指に力を込めてしまった。刹那、

「ひあつ」

少女が驚きと戸惑いを混ぜた甘い声をだした。

「——こ、これはっ、違うぞ。なんでもない。ちょっと驚いただけだ！」

聞かれてもいないのに言い訳を始めるアキラの表情は、普段の凜としたものではない。戸惑いと、それ以上の羞恥に顔を真っ赤にさせており、少女らしい一面をのぞかせていた。

そんな姿に興奮が大きくなってしまい、気づけば両手で彼女の乳房を揉んでいた。

「——ひうっ、ああっ、こらっ、だめ、だめだっ、そんな強く、するなあ！」

明らかに乳房から伝わる痺れに戸惑い、そして快感を味わっている少女の姿で股間に熱が集まっていく。

膝と腰を震わせる男装少女が甘い声をだせばだすほど、彼女の乳房を掴む手に力が入っていった。

破れた男子の制服から上半身が露わになっている姿は、倒錯的であると同時に煽情的でもあった。

(男子の制服からこぼれる巨乳がすごくエロい……ああ、もうだめだ)

今は学園にいない男装少女ケイトでは味わうことができなかつた乳房の柔らかさに夢中になっていく。

柔らかくも張りのある乳房は、力を入れると跳ね返す弾力をもっている。手のひらからこぼれ落ちそうなほど大きく、垂れることなくツンと上を向いている。

(……こんな理想的なおっぱいを隠しておくにはもったいない)

「だめえだつ、こらっつ、そんなっ、ひうっ……ちよつと、落ちつけっ、お願い、だからあ！」
「ごめん、無理だ」

短く謝罪すると、抗議を続けるアキラの胸の感触を味わい続ける。

「ああっ、だめだつ、ディノ……頼む、これ以上されたらっ、私は……せめて、こんな場所じゃなくて、もつと他の誰にも見えない場所……」

アキラの懇願を受けた刹那、彼女の身体を抱きかかえると四肢に魔力を巡らせて闘技場の真ん中から更衣室へ移動する。

授業を終えてから時間が経っているため更衣室の中は無人だった。仮に誰かがいたとしても、叩きだしていただろう。

少女の身体は筋肉質だが軽く、いつまでも抱きかかえていられると思った。腕から伝わる体温と、太ももとお尻の感覚が腕に伝わり、さらなる高ぶりを覚えてしまう。

ゆっくり少女を長椅子におろすと、再び乳房を揉む。

「お前、本当に場所を変えてっ、ひあつ、あんっ、再開するつもりなのかっ！ こらっ、まだ、揉むのかっ、こんな筋肉質な胸を揉んでもっ、おもしろくない、だろっ——ひうっ」
甘い声で抵抗するアキラだが、身体では抵抗していない。そのことを本心から嫌がっていないと判断したディノは、大きな乳房の真ん中にある固く突起した先端に舌を這わせた。

「——ひあつあああああうっ、んあああああっ！」

アキラの全身に電気が駆け巡ったような痺れが走り、身体が浮く。

乳房を揉みながら舌を乳首に吸いつくデイノのせいで、下腹部が熱く、失禁したかのようにならぬが濡れていることに気づくと、アキラは慌てて声を荒らげた。

「デイノっ、そこまでは許してないぞっ——ふああああっ、んああああっ、だ、だめだあつ、そこをつ、噛んだらつ、だめえつ、とれちやうつ、乳首つ、とれちやうつ」

自分のものとは思えない砂糖菓子のような声が唇から漏れると、羞恥から真つ赤になつた。

「あうっ、こんなことっ、許してないっ、やめ、やめろっ、デイノっ……んんんんっ」

赤子と表現するにはいやらしいすぎる愛撫に、身体が火照っていくのを止めることができないうアキラは、下腹部を中心にズボンに濃いシミが浮きあがっていることに気づいた。

乳房をおもちやのように弄ばれてもてあそんでいる屈辱と、ライバル視していた少年が自分の乳房に夢中になり周囲が見えなくなっていることへの法悦が身体の中でせめぎあう。

夢中になつて乳房を愛撫するデイノをかわいく思う一方で、自分は女ではない、男だという意識が残っていることに気づく。

「私、男なのにつ、んあつ、ひうっ、だめだあ……女の子であることおつ、捨てたのにいっ」

性別を偽って生きていたにもかかわらず、いざ乳房を見られれば羞恥を覚え、愛撫されると快感を覚えてしまった。戸惑い以上に、もっとデイノに触れられたいと身体が疼く。

「たくさん求めてくださって嬉しいですよ。でも、我慢なさらなくて……わたくしは、テイナのすべてを受け入れる準備ができていますの……ですからわたくしを気づかせてくださらなくてもいいのです」

ティアナは母親が子供に愛情を伝えるような優しいキスを少年の額にした。何度も繰り返して、少年を愛しいと思う気持ちが変わるように。

「テイナ……わたくしを求めてください」

「……ティアナ、もう限界だ。俺は、ティアナがほしい」

「ああ、嬉しい……嬉しいですよ……ずっと、そう言ってもらえることを待っていましたの……」

愛しい想い人から求められ、少女は歓喜に震える。

自然とお互いが求めあうように唇を重ねた。

「んちゅっ、ちゅっ、ちゅる……んん、んむ、んちゅるっ……」

ついでにむようなキスから始め、舌を絡めて唾液の交換をしていく。

少年は少女の胸を手で愛撫し、少女は愛撫を受け入れ気持ちよさそうに目を細めた。

唇がふやけるのではないかと錯覚してしまうほどキスを続けながら、少年は少女の下半身に手を伸ばす。

「——んんっ」

わずかに身じろぎをした少女だが、拒むことはなかった。少年の求めていることを察し、

受け入れたのだ。

ティアナは少年が脱がそうとしているスカートを自ら脱いでいく。ホックを外し、腰を浮かせると少年によってスカートが引き抜かれる。

黒いタイツと淡い緑色のショーツに守られた下半身が露わになると、少女は見るからに赤くなった。

太ももを撫でながら唇を離すと、面積の少ないショーツがタイツ越しでもはっきりわかる。

少女を怖がらせないようにそつとショーツ越しに恥部に触れると、じわり、と濡れているのがわかった。

「感じてるんだ？」

「あああつ、恥ずかしいですわっ……」

閉じてしまいそうな少女の足を掴み大きく開脚させる。あまりにも卑猥な態勢に少女は恥じらいから両手で顔を覆ってしまった。

よく見るまでもなく、少女の股間は愛液で濡れていた。ショーツはもちろん、タイツの色を濃くして染みを広げている。

ごくり、と唾を飲み込み、顔を覆ったままの少女のショーツに指をかける。これからのをされるのか覚悟した少女の身体が強張る。

少年は勢いに任せて、ショーツとタイツを一気に膝までずりおろした。

「——いやあああああつ！」

見ていなくともなにをされたのか理解した少女が、羞恥の悲鳴をあげた。

「これが——ティアナのあそこ」

「だめっ、だめですわっ……恥ずかしいっ」

少女の恥部は髪と同じブロードの陰毛が陰部の上に申し訳程度に生えているだけだ。その陰毛も愛液に濡れて光を放っており、いやらしさを感じる。割れ目には無駄な体毛は一切なく、蜜に塗れた蜜壺の入り口を惜しげもなく開いていた。

長時間身につけていたタイトのせいか、濃厚な汗の匂いが愛液と混ざって鼻孔を狂おしいほどに刺激する。

痛いほど固くなっている股間が、早く解放されたいと願うように跳ねた。

「……顔から火がでてしまいそうですわ……ああっ、そんなに凝視なさらないで！」

少女の懇願むなしく、少年は身体の位置を動かすと、蒸れた割れ目に向かって顔を近づける。

「だめっ、だめですわっ——ああっ、そんなっ、臭いなど嗅がないでっ！　クンクンしちやいやあ」

少女の言葉通り、濃厚な匂いを堪能している少年は脳が溶けてしまいそうなほど鼻孔から襲いかかる刺激にくらくらしていた。

汗だけではなく、花のような香りもするが、より強いのは発情した雌の匂いだ。わずか



に尿の匂いもするが、もしそのことを口にしたら少女は羞恥で気絶してしまうかもしれない。

蜜と香りに誘われるまま、少年は濡れそぼった割れ目に舌を這わせた。

「——ふあああああああつ」

刹那、驚きが混じった嬌声があがり、少女の細い腰が浮く。だが、腰が浮いたことで愛撫しやすくなり、本能に任せて舌だけではなく口全体を使って少女の蜜壺にかぶりついた。「だめっ、そんなっ——ああああつ！　だめですわっ、ひうっ、ペロペロなさらないでえっ……知らないっ、こんなの知りませんわっ、わたくしっ、わたくしいいいいいっ！」

短いははいえ、初めて絶頂を迎えた少女の悲鳴とともに、蜜壺から吹きだした愛蜜に少年の顔が濡れた。

断続的に腰を中心に身体を痙攣させる少女の蜜壺は男を誘うようにぱっくりと口を広げている。

(こんな光景見せられて我慢できるわけがないっ)

薄い桜色の唇が少年を欲するようにひくつく光景は、あまりにも卑猥で、欲望を掻き立てるには十分すぎていた。

もう顔を隠す気力もなく、手をどけてしまったため少女の顔がはっきりと見える。

愛蜜に塗れた口元を袖でぬぐうと、少年は濡れたシャツを脱ぎ捨てズボンを引きずりおろした。

とろん、とした瞳で少年を見つめていた少女がそそり立つ男根を目にし、身体を震わせた。絶頂の余韻から意識を回復させると、恐る恐るだがしっかりと視線を向けて離そうとはしない。

「わ、わたくしの中に、そんなに大きなものが入るのですか？」

「もちろん、ティアナの奥までしっかり入るよ」

怯えの混じった声で問われ、少年は首肯する。本番行為の経験こそ皆無だが、肛門に肉棒を入れた経験はある。それに比べれば、愛蜜に塗れ、唇を開いている秘部のほうが挿入しやすいとさえ思えてならなかった。

「わかつています。ここまできて逃げたりはしませんわ。なによりも、たとえどんなことがあってもディノとひとつになりたいと、わたくしは心から願っていますわ。だから——
わたくしの初めてを捧げます」

大きく手を広げ少年を迎えようとする少女に愛しさがこみ上げてくる。

緊張から震えながらも気丈に微笑む少女の手を取り、強く抱きしめてからキスをする。少女の震えが止まるまで何度も何度も唇を重ねた。

髪を撫で、ときには頬や額にもキスを降らせ、少女が落ちつくのを待ち続ける。

「もうっ……わたくしのことなど構わずにしてくださいよかったですのに……でも、嬉しいですよ。そんな優しいあなただからこそ、わたくしは惹かれたのです」

気づけば少女の震えが止まっている。目があうと、ゆっくりとはにかんで頷いてくれた。

「どうぞ……わたくしを貫き、あなたのものだと印を刻んでくださいましっ」
少女に導かれ、そつと亀頭を濡れそぼつた割れ目に押し当てた。

「入れるよ？」

「はい。わたくしの初めてを味わってくださいませ」

決意の宿つた瞳に射貫かれ、デイノも覚悟を決める。ゆつくりと腰を動かし、肉棒を少女の割れ目に侵入させる。

（くっ——締めつけてくるけどつ、柔らかいっ！）

蜜があふれた蜜壺の入り口はとても柔らかい。亀頭を受け入れるとゴムのように広がりゆつくりと確実に呑み込んでいく。締めつけは強すぎず包み込むような柔らかさを与え、歓迎する熱を帯びた腔内はあまりにも心地よい。

「あああつ、わたくしのつ、わたくしの中につ、入ってきますわっ……」

愛撫によつて蕩けきつた蜜壺は陰茎を呑み込みながら、肉壁で刺激していく。まるで腔内だけが別の生き物のようになうごめき侵入する亀頭を受け入れ刺激していく。

一気に腰を突き立てたい衝動に駆られるも、少女の腔壁をゆつくり味わいたい。

「——んんあつ」

少女の体内を味わいながら肉茎を入れ進んでいると、コツンと亀頭になにかがぶつかり少女の声が漏れた。

（——処女膜だ）

少女にとつてもっとも大切な、初めてである証。それを自らの男根によって突き破ることができると、少年は心から歓喜する。しかし、破瓜には激痛が伴うことも知っているため、少女の様子を窺う。

「続けて平気？」

「構いません。遠慮などなさらないで……そんなことをされたらわたくし、悲しくなってしまうますわ」

気丈にも怖がってなどいない素振りを見せる少女を愛しく思う。彼女の勇氣に応えるように少年はもう一度少女に唇を重ねると、頷き、腰を一気に動かした。

「いくよ？」

「お願いします……っ——んんっ、あああああああああああつ！」

ゴムをちぎるような感覚が肉棒に伝わると同時に、少女から絶叫があがった。だが、まだすべてを挿入しきっていない。

（ごめん、ティアナ！ もう少しだけ我慢してくれ！）

痛みを強張らせる少女の身体をしっかりと掴むと、膣内のさらなる奥へと肉棒を根元まで突き入れた。

「……はあはあ……あああつ、入っていますっ……入っていますわ……わたくしのお腹の中に、ディノが入っていますのお……」

下腹部を愛しげに撫でる少女の瞳から大粒の涙がこぼれている。痛みをせいか、それと

も喜びからなのか少年にはわからない。

うっとりした表情を浮かべて涙を流しながら下腹部を撫でる少女から母性を感じるも、痛みに苦しんでいる様子はなかった。

「大丈夫か？」

「ええ、不思議と平気ですわ……」

気づかう少年に、涙をぬぐい少女は微笑んだ。呼吸は荒く、結合部から血が流れているも、想像していたよりは平気そうなことに安堵の息を吐く。

「んっ、最初は驚きましたし、痛かったのですが……今は少しだけ痛いくらいですわ……」
(身体の相性がいいのかもしれない……なんて言ったらマナー違反だな)

つけ根まですべて収まった陰茎が、少女の蜜のころみと膣内の体温を与えてくれるので、動かずとも射精を促されるには十分すぎるほど気持ちがいい。気を抜けば、すぐに少女の蜜壺の奥へ欲望を放つてしまいそうだった。

「……我慢などしないでください……わたくしは平気ですから、たくさん動いで、気持ちよくなつて……お願いします」

「動いたら、もう止まれないよ？」

「望むところですわ……どうかディノの好きなように、動いてくださいませ」

少女のいじらしい願いに、わずかに残っていた少年の理性がすべて消えた。

おもむろに腰を引いては、勢いよく少女の尻に打ちつける。肉棒が蜜壺の中を大きく移

動し、膣内全体でこすりあげていく。

「——んあああああつ、あああああつ、ビリってしますつ、ビリってしますのおっ！」

突如動き始めた少年に、少女はわずかな痛みを覚えるが、それ以上に甘い嬌声をあげた。蜜にあふれかえった壺壁は、陰茎に刺激を与えるための襞が存在し、亀頭のみならず全体に纏わりついては壮絶な快感を与えてくる。

（これが女の子の膣内なんだつ、腰が抜けそうなほど気持ちいいっ！）

少しでも長く少女を感じていたいと奥菌を噛みしめ亀頭をより深いところに突き立てる。「あああつ、あああつ……大きいっ、大きいですわっ——ふぐうっ、あああああつ……わたくしっ、こんなことされたらっ、もう二度とっ、戻れなくなってしまうのっ！」

これでもかというほど膣壁を擦られ、蜜壺の奥に男根を突き立てられた少女も少年に負けないほど快感を得ていた。彼女の場合は肉体的以上に精神的な快感が大きい。

きっかけこそ少々特異なものではあったが、想いを秘めていた相手に告白し、受け入れてもらえただけではなく、こうして繋がることも叶ったのだ。快感と歓喜で頭がどうにかなってしまうほど、狂おしい感情が津波のように押し寄せていた。

「わたくし、はしたないですのお……初めてなのにつ、気持ちいいなんてえ！」

汗をかき呼吸を荒くし、一心不乱に腰を動かし肉棒を突き立てる少年が愛しい。自分の身体にこうも夢中になってくれるのだと思うだけで、初めて知った絶頂が再び襲いかかっできそうになる。だが、ぐっと堪えて我慢する。もう一度、絶頂を味わってしまえば行為

を続けることができない。それは嫌だ。

もうティアナにとつてディノに女の子のよさを教えるというとなつてつけた理由など、どうでもよくなつていた。今はただ、少しでも長く愛しあいたい。できることなら一緒に絶頂を迎えたいと願う。

なによりも少女の胸に秘める想いは——少年の子を孕みたい、という願望だった。

もちろん口にすることはしない。言葉にしてしまったせいで少年が躊躇ってしまうのが怖いのだ。しかし、できることなら大声で孕ませてほしいと願いたい。その上で、大量の子種を子宮で受け止めたいとさえ思う。

「ディノっ、ああっ、大好きっ、大好きですわっ——ずっとお慕いしていましたのっ、素直になれなくてっ、ごめんさいっ……」

願望を隠すために、抑えていた感情を露わにする。二度目となる愛の告白を受け、少年の腰の勢いが増す。

体内をえぐられるような圧迫感とともに、今まで生きてきて味わったことなどない快感が次から次へと押し寄せてくる。これが性行為であるのだと身をもって体験している少女にとつて、まさに幸せな瞬間でもあった。

その幸福感によつて、少女に変化が訪れる。

「ああっ、ああああっ、んああああっ、ディノっ、大好きですわっ、あああっ——んああああああっ!？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>